

おくむらていいち

奥村定一昆虫コレクション —古い標本が語ってくれること—

かるべはるき

荏部治紀 (学芸員)

かわしまいつろう

川島逸郎 (元非常勤学芸員)

去る2013年11月に、故奥村定一さんが収集された昆虫標本のコレクションが当館に寄贈されました。寄贈手続きが完了した11月29日に当館の斎藤靖二館長より黒岩祐治神奈川県知事からの感謝状と記念品が贈呈されました。

個人の方が収集されたコレクションが当館にたどりつくまでには、いろいろな物語があるわけですが、今回は、そうした経緯とともに、このような古い時代の昆虫コレクションを博物館が収集し、後世に伝えていく意味と、こうした古い標本が語ってくれることを紹介していきたいと思います。

奥村氏は、明治32(1899)年に生まれ、昭和62(1987)年8月9日に逝去されました(享年88)。本業は画家(図案家)でしたが、アマチュアのトンボ研究者として、黎明期に研究を始められた数少ない一人であり、トンボ学の幅広い分野において、多くの業績を残されています。画業としては、主に紙幣や切手などの図案を担当され、よく知られたところでは、第二次世界大戦後発行の、二宮尊徳肖像の一元札が挙げられます。一般向けの書籍としては、図鑑類などに挿絵画家としてその健筆を振るわれています。今回のコレクションには、標本だけではなく、そうした挿絵や論著の原画などの図版類が約600点含まれていることも特徴です。

奥村氏にとっては、トンボ研究は余技といえるものでしたが、戦前から、新種記載を含む分類学的研究をはじめとして、形態学的研究、生活史の研究、島嶼を含む全国各地の分布調査の成果を原著論文として公表されたほか、一般への啓発普及を目的とした総説なども手掛けられています。

失われた？奥村コレクション

さて、実はトンボ研究者は、長い間奥村コレクションはすでに失われたものと考えてきました。奥村氏は、トンボの分類学の研究者としての業績もあり、その中には、氏が発表した、キロヤマト

ンボ *Macromia daimoji* Okumura, 1949 や、モイワサナエ *Davidius moiwanus* (Matsumura & Okumura in Okumura, 1935) などの日本産のトンボの新種記載も含まれています。

このような新種を公表する時に指定するのがホロタイプ(正基準標本)と呼ばれるもので、その生物を代表するただ一つの基準となるため、分類学の研究上大変重要なものです。

奥村氏は、ホロタイプを、当時の慣習から一部を除いて個人的に管理されていました。こうした個人管理のコレクションは、研究者にとってもアクセスが難しく、さらに持ち主が亡くなると標本の行方もわからなくなってしまうことがあります。タイプ標本は学問の世界の公共財ともいえるもので、学名を規定する動物命名規約では、公的機関で保管することを推奨しています。

なお、昆虫の研究者は、日々の生活もついつい虫が中心になってしまい、家族(とくに配偶者)との関係は微妙なものがあります。収集されたコレクションも、亡くなられた方が生前から同好の士に標本の処理を任せてある場合には、きちんと処理されることもあります。しかし、多くの場合残された家族にとっては、標本はどうしたらよいかわからない厄介者となり、廃棄されてしまうケースもあるのです。

奥村コレクションも、奥村氏が逝去された後、コレクションがどうなったか手がかりもなくなっていました。こうした状況から、トンボ研究者は、「奥村コレクションは、たぶんもう失われてしまっているのだろう」と考えていたわけです。

保管されていたコレクション

さて、2012年の夏に当館で特別展、「大空の覇者～大トンボ展～」が開催されました。この展示は、日本を含む世界各地の標本を中心にトンボの魅力を紹介したのですが、会期中に世界のトンボ研究者が集まる「国際トンボ学会議」も開催されました。このことは、神奈川新聞など

のマスコミでも紹介されたのですが、この記事を書きかけに国際会議の最中に私たちを訪ねてこられた方がおられました。お目にかかるのと年配の女性で、挨拶を交わした後「奥村と申しますが、父のトンボのコレクションの件で…」というようなお話から始まったと記憶しています。少しお話を伺うと、なんと「あの」奥村氏のご遺族の方で、「父」とは「奥村定一さん」のことだったのです！二人で顔を見合わせて「まさか!」と思ったことを今でも思い出します。ご遺族は、千葉県にお住まいで、引っ越しを計画中でした。そこで標本を処理しようと考えていたところ、横浜在住の従兄の方が国際会議の新聞記事をご覧になり、館においでになったということでした。

こうしてみると、たまたまあの時にトンボの特別展と国際会議があり、それをたまたま従兄の方が新聞記事でご覧になるという幸運が、奥村氏のコレクションを当館へと導いてくれたことになります。

コレクションの内容

さて、トンボ特別展の撤収作業も一段落した12月に、千葉県のお宅に伺いました。事前にお聞きしたお話で、『父が亡くなってからは、防虫剤の交換もせず保管していただけなので、状態もわからない。万一虫食いなどで破損しているのも怖くて確認もしていない』ということでした。少なくとも奥村氏が亡くなられて25年近くは経過しているわけですので、下手をすると「標本はすべて害虫に食べられて粉になっている」ような最悪の状況もあることを



図1 ヤンマ科のコレクション。左下のマダラヤンマ(1935年の標本)の青い色彩が見事に保存されている。

覚悟しながら、標本箱が保管されているという二階の一室にありました。恐る恐る箱を取り出してみると…、もちろん、標本の中にはラベルがついていないものもありましたし、虫食いになっているものもありましたが、そのほとんどの状態は戦前のものとは思えないほどに良好なものでした。

日本は高温多湿で標本害虫が大活躍する、標本を管理する立場からは、最悪の環境の国でもあります。そうした経験からは、今回の保存状態の良さは驚きでした。幸い標本は、「ドイツ型標本箱」という密閉性に優れた箱で保管されていたこと、箱の内部にクレオソートで防虫がなされていたこと、乾燥した場所で保管されてきたことなどが重なって、このような良好な状態で保存されたと考えられました。中を確認していくと、ぱっと見ても相当に貴重そうな標本が見て取れます。戦前の標本なのに、色彩がきれいに残っているものもあってそれも驚きでした（図1）。

ご遺族の方によれば、奥村氏は「数回の引っ越しの度に、母に言われて少しずつ標本を処分させられていた」そうです。トンボだけは最後まで取っておかれたそうですが、捨てられた標本にもきつと貴重なものが含まれていたと思われ、その点には残念です。

コレクションは、付随する資料も含めると膨大なものでした。公用車のハイエースに満載で、二回にわけて博物館まで慎重に運搬して、早速整理を始めました。一番大切なホロタイプ標本は、すぐに該当するものが見つかりました。奥村氏が発表された中でも、もっとも著名なキイロヤマトンボ *Macromia daimoji* Okumura, 1949 のホロタイプ（図2）も良好な状況でしたし、他に *Asiagomphus coreanus* (Doi & Okumura, 1937) など数種のホロ



図2 キイロヤマトンボ 下がホロタイプ。

タイプが無事に保管されていました。昆虫標本のコレクションは、3,368頭でしたが、この中には、上記のような分類学上重要な種類だけではなく、多くの驚きがありました。

ひとつは、奥村氏が戦前から海外の研究者と活発な交流をしていることがわかったことです。コレクションには、東南アジア各地、南米や北米など広く世界各地の標本が含まれています。戦前によくここまで収集されたと感心させられます。もちろん、国内の研究者との交流も盛んで、当時の多くの著名な昆虫研究者を採集者名として見るができます（図3）。各地の研究者と交流をされていた貴重な情報の実例で、こうしたことも標本が物語ってくれることのひとつです。



図3 ベッコウトンボ。右は、著名な昆虫研究者黒澤良彦氏の採集品。

一方、多くが戦前の古い標本だけあって、地域の自然史資料としても重要な意味合いを持つコレクションであることもわかってきました。

たとえば、現在の東京都は、過去のトンボの記録はウソではないかというくらいに徹底的な自然破壊がなされているわけですが、奥村コレクションには戦前の23区内で収集された種類が多く含まれています。現在東京都下や23区内では絶滅しているエゾトンボ、グンバイトンボなどの標本はその代表です。エゾトンボは、湿地に生息する種ですが、現在の南関東では非常に希少です。この種の『東京、用賀』というラベルの戦前の標本にも驚かされました。現在の世田谷区用賀界隈からはとても考えられませんが、かつてエゾトンボが生息するような湿地があったことを物語っています。グンバイトンボは、関東では湧水流に生息していた種ですが、都内の『石神井』（現在の練馬区石神井公園）などで採集された標本が残されていました。これも当時の石神井は湧水

が豊富に存在したことを教えてくれます。現在では、全国に10カ所ほどしか産地が残っていない、絶滅危惧種として有名なベッコウトンボも、香川県など数カ所の標本が残されていました。

我が神奈川県に関するものでも、横浜市内の採集地案内の中で、種名が紹介された記録しかなかったトラフトンボ（小田原産）の雌の標本が発見されました（図4）。初めて見る神奈川県産の標本に興奮しましたが、当時の小田原にトラフトンボが好む水生植物豊富な池があった、ということもこの標本が物語ってくれます。

このように、きちんとしたデータが付された標本は、現在蓄積されている生態的な知見から、当時の環境を復元することにも役立ちます。



図4 トラフトンボとそのラベル（右下）。「小田原 5.5.27. (= 1927年5月5日)」と読める。

奥村コレクションは、今回紹介したように、偶然の幸運が重なって当館に収蔵されることになったわけですが、その多くは保存用の三角紙に入った状態で、種類の同定を待っているものも多くあります。今後整理を進める中で、さらに多くの発見があるものと期待されます。

研究者であれ、愛好家であれ、その人が人生をかけて収集した標本から得られる情報はたくさんあることは、今回紹介した事例でもご理解いただけるでしょう。しかし、そうした標本は、なにもしなければあっけなくこの世から消えてしまいますし、一度失われた標本は復元することはできません。博物館は、たとえば、当館生命展示室の昆虫標本のように、「格好良い、美しい」な世界を紹介して、自然との触れ合いの入り口となる面もありますが、今回のような歴史的な標本を保管して、将来に自然史資料として伝えていくことも重要な役割となっているのです。